

シンポジウム／「演じる戦争・観る聴く戦争」

口承文芸から戦争を考える

野村 敬子

はじめに

シンポジウムで私に与えられたテーマは「戦争の話の聴くこと」であった。ここで扱う戦争とは昭和十六年十二月八日の対米宣戦詔書発表に始まり、昭和二十年八月十五日終戦勅玉音放送に至る太平洋戦争・大東亜戦争のことである。レジュメには昭和五十年に聴いた講演速記録（開戦当時外相秘書官加瀬俊一、蔵相賀屋興宣、内閣秘書官細川護貞）を示した。私はこの戦争の帰還兵から「戦地での話し語り体験について」聴くところとなった。ニューギニア戦線で瀕死の兵士たちに語りをした看護兵の行動様式、また伝令を命じられたジャングルで突如として祖母の昔話「姥捨山」が甦り、パラオ樹に刃傷を付け目印にして進み、祖母の声に励まされながら任務を果たした体験などを聴き取った。それについては平成二年に報告をしたが、近著『語りの廻廊―聴き耳の五十年』にも収載した。しかしそれら口承

文芸行動は極めて人間的で、およそ殺戮の場には似つかわしくない。その意味で私の聴き取りは戦争そのものと正面から向い合ったと言いたい。

戦後四十五年を経ての聴き取りは「大本営戦争シナリオ」。「演じさせられた国民たち」など歴史が証した苦渋が露呈して心痛むものであった。そこで私が認識させられたのは、「戦地の話を四十五年間秘めていた事実の重さ」と、それに比して「私の聴き耳の不備について」であった。もしかしたら私の聴き耳の時代性が、彼らをして戦地語りに向わせたのかも知れない。山下清画伯は兵隊の位についての知見があるが、私はほとんど学習しなければ師団も旅団も判じられなかった。昭和から平成への移ろいと不備な聴き耳の所在が、四十五年の沈黙を解除したことと無縁ではなさそうである。

一、大東亜戦争のシナリオ

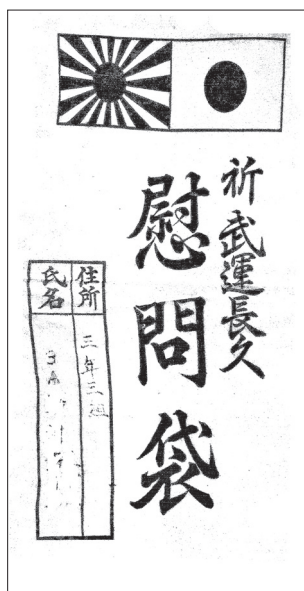
国民学校一年生で終戦を迎えた私は墨塗り教科書世代である。奉安殿を破壊する鈍い音を聞きながら、先生の命令通りに墨を塗った。戦時中の学校体験記憶は全くない。

もの心ついた時は民主主義教育が台頭し、男女平等・基本的人権・平和憲法のもと「新生日本の子ども」であった。大東亜戦争グッズは悉く親の手で処分されていた。十代に戦争文学を読むまで戦争を知識化することもなかった。その時代性が六十

年安保で大きく揺らぐのであるが、私の所属した「國學院大學説話研究会」の昔話探訪は六十年代世相に誘発されるように白田甚五郎先生指導のもと、「名もなき民の声」へと向って行く。少なくとも私の聴き耳は農民たちの生きた言葉を求め、語り手の心性へと深入りするのであった。

出会いから二十年が過ぎた平成二年に、新田小太郎さんは四十五年間封印したニューギニアの苛烈な日々、病と飢餓、死の行軍、人食いの恐怖、俘虜の日々など戦争体験を語り始めている。それは昭和十八年師走ニューギニア上陸から終戦に至る、日本軍が制海権・制空権を失った南の島における迷走を語り継いだことになる。新聞の尋ね人欄で共に語った今義孝さんを探し出して再会をはかり、二人は交々に「雪第三十六師団」の悲運を言葉にしている。

二人は支那事変中に大陸に渡っているのです、大東亜戦争にいついての大本営シナリオは伝えられなかったという。上官の命令



野村家に残っている品
縮小コピー

だけが全てであったが、中国で受け取る慰問袋から本土情報がかぼれ落ちた。二人は中国で十八年十月大改編された第三十六師団歩兵聯隊に編入されて南下、上海から台湾・マニラを経由して、海路をニューギニアに向う時、少国民の「兵隊さん鬼畜米英を撃つて下さい」などの手紙から大東亜戦争シナリオを自覚していった。「鬼畜米英の兵士の弱体は帝国軍人の敵ではない」と、慰問袋からは戦意高揚を煽る小冊子も出て来たそうである。外務省の『太平洋戦争日曆』で大本営シナリオを追う。昭和十六年十二月八日対米英戦線詔書渙発。真珠湾攻撃。マライ上陸。タイ進入。比島・ガム空襲。日を追って太平洋諸国を占領。十二日にこの戦争を大東亜戦争と呼称。ガム・九龍半島・ルソン・ボルネオ・香港・ペナン島・ミンダナオ・ウエーキ島・重慶・クワンタン・マニラ・セレベス・ニューギニア・シンガポールなど占領。十七年四月十九日ニューギニア制空権獲得。

これらからは太平洋諸国帝国化への野望が叶えられたかの様相であるが、十八年からの攻略は危機に瀕していた。ガダルカナル・アッツ島・キスカ島・ソロモン・東ニューギニアラエ・タラワ・マキン等の全滅放棄。九月十五日「東ニューギニア方面に増勢を行わぬこと」という大本営決定が出されている。米軍・連合軍のニューギニア占領上陸が始まっていたのである。しかし十月二十二日大本営は「ニューギニアへ満州より防備強化のため大兵力転用決定」を命じた。このシナリオこそがニューギニアの悲劇幕開けであった。国連軍包囲網の中を六隻の船団

で南下、第一隊は十二月に上陸。後続の十九年、今さんたちの船は撃沈。上陸は劣悪な戦況にあった。同じ四月二十二日に米軍が上陸していた。今さんの言葉で「大きき鳥が口開けて待ちだ処さ、海亀の仔がむえで（孵化して）這って出で食われるよだった。船の沈む前に缶詰とか砂で隠して逃げた」

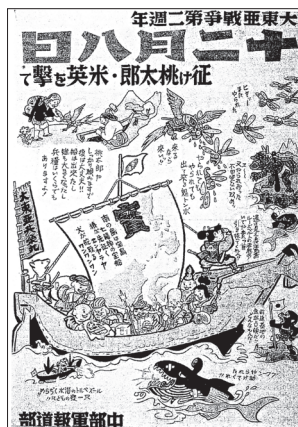
日本では十一月五日にタイ・満州・比島・ビルマ・汪政権各代表と「大東亜会議」を開催。大東亜共同宣言を発表。七日に「大東亜新聞会議大会」を開き宣言を大々的に喧伝している。その結束には大東亜の物語が必要とされていた。

二、東方の騎士・日本桃太郎

昭和十八年公開『桃太郎の海鷲』は真珠湾攻撃アニメーション映画である。正義の味方桃太郎が大東亜を米英からとり戻すために戦う。昭和二十年制作『桃太郎海の神兵』も同様の鬼畜米英撃破物語で、戦意高揚をはかる強い目的が内在する。映画挿入譚「東方の騎士」は大東亜救世主日本の存在感を顕示する。「むかし。南国にゴアの楽園があった。ある日西洋の商人が『お情け深い王様。船が難破して困っています』商人はコインを出し『このコインの土地をお与え下さい』と頼んだ。王様は承知した。ところが商人は地図の上にコインを置き全土を占領してしまった。その時、東方から白馬の騎士が現われて西洋人を追い拂い再びゴアは楽園に戻った。ゴアの王様は感謝した。

その東方の騎士こそ日本の桃太郎である。めでたしく（シンボで紹介映像）。

映画は挿入譚を踏まえて桃太郎が動しく米英を撃ち、大東亜を帝国化する物語にと進められている。新田さんたちは中国大陸で、日本の海軍省が桃太郎を戦争に巻き込む波動を慰問袋の内容物で感じ取った。陸軍のメニューと海軍のそれは異なっていたからである。



日米開戦ポスター 中部軍報部／発行 昭和18年（1943）



桃太郎の海鷲 辰巳松竹映画劇場 昭和18年（1943）

海軍省が昔話の主人公を救世主とし、桃太郎に多くの望みを託したが戦地では全く違う事情にあった。『赤紙』で橋本武氏が中国戦線での体験を綴っている。昔話を聞きとり郵送しようとしたところ、上官に見咎められ厳しく制せられたという。昔話原稿は厳しく検閲を受け破り捨てられた。以降は手帖の表紙を割り隠して保存し終戦で持ち帰った。昔話は認めず、国民的人気の桃太郎だけを戦争に利用したことが知られる。

三、ニューギニアの語り

「患者ありき 路傍に打倒れ 部隊に追付も出来ず やせさ
らばへ戦友にも手を離されたるなり このまま居ては死あるのみ 如何するや 自決覚悟しあり 然れ共武器もなし」

『雪第三十六師団戦誌』にはニューギニア上陸から終戦までの苛烈な日々が記録されている。前出の詩のような兵士たちが大勢いた。九死に一生を得て帰還した兵士たちが戦誌を編み鎮魂譜となした。慰霊の碑も続いて作られ、その魂の凍るような戦禍が偲ばれるところである。

新田小太郎さんは、この戦地で倒れた兵士たちに昔話を行ったという。戦誌にある行軍中路傍に倒れた兵士たちは、誰れに看取られることなく白骨となる。何千と知れない兵士の死に新田さんは人の死とは何かを考え続けた。

新田さんは鍛錬班長として、瀕死の兵士たちを看取った。そ

して昔話を語り聞かせた。砲撃の恐怖に「川ノ内囃子の太鼓。お稲荷さんの祭だべ」と、高熱にうなされる兵士に語りかけた。同郷の兵士が次々にマラリヤやアミーバ赤痢で倒れた。語りは方言で故郷への想いをかきたてながら聞かせていた。亡くなった兵士は念拂を唱え土に還してやる。野ざらしの死から救うことが、せめてもの安らぎであった。

戦死には「特攻」のように志願し「殉国」の美学に語られる死と、対極的な群れの死がある。殉国の死は美学の中で再生するが群れの死は落伍として無惨である。判沢弘氏「歪曲された農民兵士像」には「病氣や負傷で落伍してゆく兵士に看護のため一緒に落伍していった。その多くは農民兵士であった」とある。そして彼は「私は彼らを見捨ててきた」と述懐している。インテリ兵と同郷の兵を看取る農民兵新田さんの違いが、はからずも逆光のように浮び上る。そこで注目すべきは言葉である。新田さんは軍隊に居ながらにして、その語り言葉は故郷風土の民俗をたっぷりと吸い込んだ方言であったという。軍隊には特殊社会を表徴する軍隊用語がある。各地から集まった人間をコントロールする特殊言語であったが、軍隊の言葉で昔話は語れない。語ったとしたら全く別のものになる。新田さんが上官に罰を受けても、病の床で死に臨む兵士たちに民俗の心を回復しようとして語った方言に注目したい。雪国の兵士たちは雪国の言葉で看取ること浮ばれる。語り言葉を継ぐ農民兵士における行動様式にこそ、口承文芸から見た戦争を如実に知ることが

出来るのではないだろうか。即ち戦争から昔話は離反する。

戦地でのインテリ兵士と農民兵士の違いも顕著である。判沢氏が見捨てて行き過ぎたという看護を現に新田さんは実践しているが、農民兵士には「死なば諸共」の共同体発想が根強い。弘前八師団を母体とし、秋田・山形・岩手編成・同郷の兵士たちが多い雪第三十六師団には特にそれが顕著であったらしい。東北農民の連帯感には村に帰ればユイ（相互扶助）仲間である。共同体で練り上げられる相互扶助に結ばれる農民心情も見逃せない。それはインテリ兵士の嫌戦思想と異質のものである。『中井英夫戦中日記』の「黎明断じて遠からず 首が飛んでも死ぬものか」を合言葉に主体化した戦争と大きな違いがある。新田さんは東北農民として、死に臨む仲間に方言で共同体の心情を回復させ、自らも方言語りで声の想像力を掻き立て、生命の灯を点じ続けるのである。

戦地において声の想像力で生を得た事例は今義孝さんにも確認し得る。軍隊は上官命令こそが全てである。今さんはジャングルに伝令を命じられて死を覚悟した。前任者が一人として戻らないと知り、死と対峙した時に不思議なことが起った。幼児体験が甦り「姥捨山」の昔話を語ってくれた祖母の声が聴こえて来たのであった。既に死を受け入れた今さんに青森弁の伝承世界が、生々しく再生された。祖母は彼を母親代りに育てた母なる人である。死のその刻に兵士たちは母の名を呼ぶと聞くが、原点回帰の母恋いであつたのだろうか。そこにおける今さんの

行動様式に注目したい。国家に殉ずる兵士を演じ続けたシナリオは、その時点で返上し、命令を下した上官の非情も無視して、ただひたすら祖母の青森弁に従って行く。昔話のモチーフに生きる望みを見出した今さんは、更に祖母の語り声に深入りしていく。現地のニューギニア人に応援を求め同道を頼む。そこには「雪の八甲田悲劇」を祖母から聴いた声があつた。「八甲田で軍人が死んだのは青森の衆に知恵を授からなかつたからだぞ」と口癖にしていた。地元民の経験的な知恵に助けられ、川を渡り野宿をし、パラオ樹に目印の刃傷を付け、ジャングルで任務を果たし得たのであつた。そこには消耗されるだけの農民兵士から、一人の農民として解放された姿がある。この変化について今さん自身戦誌に「うば捨て山のジャングルの中で」と題した文章を寄せている。

「この島で戦う相手よりなお恐ろしいのは壮大に人間の前に立ちほだかつている自然である」と記す。自然の巨大さに立ち向う叡智は農民にこそ備わつたものであつたに違いない。兵士として見捨てられかけた農民が、農民なればこそその声の想像力で、自らを見捨てなかつた証でもあろうか。

私は聴き耳の不備を自覚すると前に記した。口承文芸から見た戦争の主題についてさえ、私の聴こえは戦争に内在する人間の可能性にのみ向うことを、改めて申し上げなければならぬ。

四、終りに

戦争についての聴き取りは全てが生き残った人々の言説に拠る。死で完結した人びとの上にこそ戦争の真実があったと言えよう。

言うに言われぬ話もあり、彼らも私も黙然と過ごしてきた。武田泰淳『ひかりごけ』に扱われた「人食いの話」などは近年辺見庸『もの食う人びと』でもレポートされ、何年経ても風化しない。足を傷した者に「食われるから逃げろ」と忠告したので助かった話などは世間話にあるものの、まだ聴く耳が私には熟さない。大岡昇平『俘虜記』に見られる男たちのエログロナンセンスな自慢話も同系のものである。聴き耳には男と女がある。実際の性とは関係なく、私の場合は女の聴き耳で女の特性には敏感に反応するようである。

当学会シンポジウムに通底するテーマは「女性」である。「終りに」には、「戦争後の戦争」を母なる語りで生き延びた事例を記したい。

今義孝さんは戦犯に疑われ残された。新田小太郎さんは帰還したが今さんは現地人を殺害した上官の身代わりになされ、ホーランジャンで軍事裁判にかけられることになった。その無念について彼は一度も口にしない。恨みも言わない。ひたすら、そこに語り続けたのは祖母の昔話に助けられたことであった。

捕えられてから今さんは毎晩、お祖母^{ばあ}さんの夢ばかり見たという。「姥捨山」以来の祖母への母性回帰に違いない。ある日牢から出されて裁判を受けることになった。いよいよ結審であった。その時、今さんが戦争中飼育していた鶏が騒ぎ出した。「二ワドリア タマゴナスタ！」と今さんは叫んだ。裁判長は「オッフルドマン！ 狂人は裁けない」と今さんを解放した。この叫びは「お祖母^{ばあ}さんから昔話聴いだすべ。鶏が卵なして長者にしてくれる。嬉しくてな。お祖母^{ばあ}さんから救われたんす」と、しきりに「鶏長者」の伝承体験と重ねて説き明かしている。「老嫗夜譚」にも同様の語りが見られる。日本からも戦友からも捨てられた兵士として、今さんは戦争総決算生命存続の瞬間を祖母の伝承記憶・母なるものへの回帰で勝ち取っている。そこには兵士を消耗消費する不毛な軍隊のシステムと対立概念の、母なる伝承世界の精神の解放・豊饒な再生システムがせめぎ合う。少なくとも今義孝さんの戦争は男性原理の軍隊と、女性原理の祖母の語りにおける永遠のテーマが拮抗対立した「場」に違いない。

追記

十二月のNHKラジオ深夜便でニューギニアのホーランジャン軍事裁判で戦犯となった男性の話を聞いた。巢鴨プリズンBC級戦犯として服役、昭和三十二年に釈放されている。現地人殺害の罪状は今さんと同じであった。改めて、今さんの昔話体験が導いた現実、人生の不思議を考えた。

(のむら・けいこ／國學院大學栃木短大講師)